

ジョナサン・スウィフト

2 ^{すり} 盗人の曲にあわせたバラッド

I.

昔々 古い話にあるように
どうしてもラテン語で詩を書きたがる修道士がいた
だが 作りかけては苦戦した
ぴったりの言葉が見つからぬ
しかたがないから 5
途中を空白のままにして
絶望的な気持ちで床に就いた
なんと 翌日 見事な言い回しができあがっていた
それが不思議にも詩にぴったり
コーラス 批評家には好きに言わせとけ 10
そんな助けがありや 誰だって詩を書くもんだろう

II.

これには修道士も驚いた
きっと精霊の仕業に違いない
鍵穴か窓から入ってきたのだ
読み書きできる精霊に違いない 15
だが わからないのは
はたしてそれが友か敵か
上から来たのか 下から来たのか
いずれにせよ 天使か妖精のように親切だ
自分じゃそんなにうまくはできなかつたろうから 20
コーラス 批評家には 云々

III.

ちょうどそのように スウィフト大先生は脳みそを酷使して
^{バラッド}歌を作っている途中 行き詰ってしまいました
足りない詩才を大奮闘で補っていましたが
そんな時に見えざる助けを得たのです 25
スウィフト博士さん
天与の詩才に感謝しなさい
詩が書けずに窮地に陥っていたと率直に認めなさい
そうすれば これは若い妖精の仕業であっても

筆跡から悪魔が書いたのではないとわかるでしょう

30

コーラス 批評家には 云々

(三木菜緒美訳)